

遠野の奇聞

泉鏡花作

明治四十三年九月

近ごろノ、おもしろき書を読みたり。柳田國男氏の著、遠野物語なり。再讀三讀、尚ほ飽くことを知らず。此の書は、陸中國上閉伊郡に遠野郷とて、山深き幽僻地の、傳説異聞怪談を、土地の人の談話したるを、氏が筆にて活かし描けるなり。敢て活かし描けるものと言ふ。然らざれば、妖怪變化豈得て斯の如く活躍せんや。

此の書、はじめを其の地勢に起し、神の始、里の神、家の神等より、天狗、山男、山女、塚と森、魂の行方、まぼろし、雪女。河童、猿、狼、熊、狐の類より、昔々の歌謠に至るまで、話題すべて一百十九、附馬牛の山男、閉伊川の淵の河童、恐しき息を吐き、怪しき水掻の音を立て、紙上を抜け出で、眼前に顕る。近來の快心事、類少なき奇觀なり。

昔より言ひ傳へて、隨筆雜記に倂を留め、やがて此の昭代に形を消さんとしたる山男も、又ために生命あるものとなりて、峰つたひに日光邊まで、のさ／＼と出で來らむとする概あり。

古來有名なる、岩代國會津の朱の盤、かの老媪茶話に、

奥州會津諏訪の宮に朱の盤といふ恐しき化物ありける。或夕暮年の頃廿五六なる若侍一人、諏訪の前を通りけるに常々化物あるよし聞及び、心すごく思ひけるをり、又廿五六なる若侍來る。好き連と思ひ伴ひて道すがら語りけるは、此處には朱の盤とて隠れなき化物あるよし、其方も聞及び給ふかと尋ぬれば、後より來る若侍、其の化物は斯様の者かと、俄に面替り眼は皿の如くにて額に角つき、顔は朱の如く、頭の髪は針の如く、口、耳の脇まで切れ齒たゞきしける：・・・・

と云ふもの、知己を當代に得たりと言ふべし。

さて本文の九に記せる、

菊地彌之助と云ふ老人は若き頃 駄賃を業と
せり。笛の名人にて、夜通しに馬を追ひて行く時な
どは、よく笛を吹きながら行きたり。ある薄月夜に
あまたの仲間の者と共に濱へ越ゆる境木峠を行くと
て、又笛を取出して吹きすさみつゝ、大谷地（ヤチ
はアイ又語にて濕地の義なり内地に多くある地名な
り）又ヤツともヤトともヤとも云ふと註ありと云ふ
所の上を過ぎたり。大谷地は深き谷にて白樺の林し
げく、其下は葦など生じ濕りたる澤なり。此時谷の
底より何者が高き聲にて面白そ ー ー と呼はる
者あり。一同悉く色を失ひ遁げ走りたりと云へり。

此の聲のみの變化は、大入道より尚淒く、即ち形
なくして却つて形あるが如き心地せらる。文章も三
誦すべく、高き聲にて、面白そ ー ー は、遠野の聲
を東都に聞いて、轉寢の夢を驚かさる。

白望の山續きに離森と云ふ所あり。その小字
に長者屋敷と云ふは、全く無人の境なり。茲に行き
て炭を焼く者ありき。或夜その小屋の垂菰をかゝげ

て、内を覗ふ者を見たり。髪を長く二つに分けて垂れたる女なり。此あたりにても深夜に女の叫聲を聞くことは、珍しからず。

佐々木氏の祖父の弟、白望に茸を採りに行きて宿りし夜、谷を隔てたるあなたの大なる森林の前を横ぎりて女の走り行くを見たり。中空を走る様に思はれたり。待てちやアと二聲ばかり呼ばりたるを聞けりとぞ。

修羅の巷を行くものの、魔界の姿見るが如し。此種の事は自分實地に出あびて、見も聞きもしたる人他國にも間々あらんと思ふ。われ等も度々傳へ聞けり。此と事柄は違へども、神田の火事も十里を隔て、幻に其の光景を想ふ時は、おどろ／＼しき氣勢の中に、ふと女の叫ぶ聲す。兩國橋の落ちたる話も、先づ聞いて耳に響くはあはれなる女の聲の——人雪類を打つて大川の橋杭を落ち行く状を思ふより前に——何となく今も遙かに本所の方へ末を曳いて消え行く心地す。何等か隱約の中に脈を通じて、別の世界に相通ずるものあるが如くならずや。夜半の寢覺に、或は現に、遠吠の犬の聲もフト途絶ゆる時、都大路

の空行く如き、遙かなる女の、ものとも知らず叫ぶ
聲を聞く事あるやうに思ふは如何。

又此の物語を讀みて感ずる處は、事の奇と、ものゝ
妖なるのみにあらず。其の土地の光景、風俗、草木
の色などを不言の間に聞き得る事なり。白望に苜を
採りに行きて宿りし夜とあるにつけて、中空の氣勢
も思はれ、茸狩る人の姿も偲ばる。

大體につきて此を思ふに、人界に觸れたる山魅入
妖異類のあまた、形を變じ趣をこそ變たれ、敢て三
國傳來して人を誑かしたる類とは言はず。我國に雲
の如く湧き出でたる、言ひつたへ書きつたへられた
る物語に粗同じきもの少からず。山男に石を食す。
河童の手を奪へる。其等なり。此二種の物語の如き
は、川ありて、門小さく、山ありて、軒の寂しき邊
には、到る處として聞かざるなき事、恰も幽靈が飴
を買ひて墓の中に嬰兒を嘔みたる物語の、音羽にも
四ツ谷にも芝にも深川にもあるが如し。恠く言ふは、
敢て氏が取材を難ずるにあらず。其の出處に迷ふな
り。ひそかに思ふに、著者の所謂近代の御伽百物語

の徒輩とはいにあらずや。果はたして然しからば、我わが可な懐つしき明みやう神じんの山やまの木菟みづくの如ごとく、其その耳みみを光ひからし、其その眼めを丸まるくして、本朝ほんてうの鬼きのために、形かたちを蔽おほふ影かげの霧きりを拂はらつて鳴なかざるべからず。

此この類たぐひ尚なほほあまたあり。然しかれども三三さんさんに、

・ ・ ・ ・ ・ (前略ぜんりやく) ・ ・ ・ ・ ・ 嘗かつて茸きのこを採とり

に入いりし者もの、白望しろみの山奥やまおくにて金きんの桶をけと金きんの杓しゃくとを見みたり、持もち歸かへらんとするに極きはめて重おもく、鎌かまにて片端かたはしを削けつり取とらんとしたれどそれもかなはず、又また來こんと思おもひて樹きの皮かはを白しろくし菜しやうりしたりしが、次つぎの日人ひびと々と共ともに行ゆきて之これを求もとめたれど終つひに其木そのきのありかをも見み出し得えずしてやみたり。

と云いふもの。三州しゅうきだん奇談きだんに、人ひとあり、加賀かごの醫王山いわうざんに分入わけいりて、黄金わうこんの山葵わさびを拾ひろひたりと云いふに類たぐひすといへども、恚かの如ごときは何なんとなく金玉きんぎよくの響ひびあるものなり。敢あへて穿鑿せんざくをなすにはあらず、一部いぶの妄誕まうだんのために異靈いれいを傷きずけんことを恐おそるればなり。

又また、事ことの疑うたがふべきなしと雖いへども、其怪そのくわいの、ひとり風かせ

の冷き、人の暗き、遠野郷にのみ權威ありて、其の威の都會に及び難きものあるも又妙なり。山男に生捕られて、遂に其の兒を孕むものあり、昏迷して里に出でずと云ふ。恁の如きは根子立の姉のみ。其の面赤しといへども、其の力大なりと雖も、山男にて手を加へんとせんか、女が江戸兒なら撲倒す、
・
・
・
御一笑あれ、國男の君。

物語の著者も知らるゝ如く、山男の話は諸國到處にあり。雜書にも多く記したれど、此の書に選ばれたるものゝ如く、まさしく動き出づらん趣あるは殆どなし。大抵は萱を分けて、ざわ／＼と出で來り、樵夫が驚て逃げ歸るくらゐのものなり。中には握飯を貰ひて、ニタ／＼と打喜び、材木を負うて麓近くまで運び出すなど言ふがあり。だらしのなき背高にあらずや。其のかはり、遠野の里の彼の如く、婦にこだはるものは餘り多からず。折角の巨人、いたづらに、だゞあがんまの娘を狙うて、鼻の下の長きこと其の脚の如の高仙人、願くは木の葉の禪を緊一番せよ。

さりながら憚る太平樂を並ぶるも、山の手ながら
東京に棲むおかげなり。奥州・・・

花巻より十餘里の路上には、町場三ヶ所あり。

其他は唯青き山と原野なり。人煙の稀少なること北
海道石狩の平野よりも甚し。

と言はれたる、遠野郷に、もし旅せんに、其處に
ありて猶ほ此の言をなし得んか。この臆病もの覺束
なきなり。北國にても加賀越中は怪談多く、山國ゆ
ゑ、中にも天狗の話は枚擧するに違あらねど、何故
か山男につきて餘り語らず、或は皆無にはあらずや
と思ふ。たゞ越前には間々あり。

近ごろ或人に聞く、福井より三里山越にて、杉谷
と言ふ村は、山もて圍まれたる濕地にて、菅の産地
なり。此の村の何某、秋の末つ方、夕暮の事なるが、
落葉を拾ひに裏山に上り、岨道を俯向いて搔込み居
ると、フト目の前に太く大なる脚、向脛のあたりス
クノゝと毛の生えたるが、ぬいとあり。我にもあら
ず崖を一なだれにころげ落ちて、我家の背戸に倒れ

込む。其處にて吻と呼吸して、然るにても何にかあらんと僅かに頭を擡ぐれば、今見し處に偉大なる男の面赤きが、仁王立ちに立はだかりて、此方を瞰下るし、はたと睨む。何某は其のまゝ氣を失へりと言ふもの是なり。

毛だらけの脚にて恩出す。以前讀みし何とか云ふ書なりし。一人の旅商人、中國邊の山道にさしかゝりて、草刈りの女に逢ふ。其の女、容目ことに美しかりければ、不作法に戯れよりて、手をとりとともに上る。途中にて、其の女、草鞋解けたり。手をはなし給へ、結ばんといふ。男おはむきに深切だてして、結ぶやるとて、居屈みしに、憚りさまやの、とて衝と裳を掲げたるを見れば、太脛はなほ雪の如きに、向う脛、づいと伸びて、針を植ゑたる如き毛むくじやらと成つて、太き筋、蛇の如くに蜿る。これに一堪りもなく氣絶せり。猿の變化ならんとありしと覺ゆ。山男の類なりや。

またこれも何の書なりしや忘れたり。疾き流れの谿河を隔てゝ、大いなる巖洞あり。水の瀬激しけれ

ば、此方の岸より渡りゆくもの絶えてなし。一日里
のものの通りがゝりに、其の巖穴の中に、色白く姿亂
れたる女一人立てり。怪しと思ひて立ち歸り人に語
る。驚破とて、さそひつれ行きて見るに、女同じ處
にあり。容易く捲るべきにあらざれば、唯指して打
騒ぐ。恚る事二日三日になりぬ。餘り訝しければ、
遙かに下流より遠廻りに其の巖洞に到りて見れば、
女、美しき棲も地につかず、宙に下る。黒髪を逆に
取りて、巖の天井にひたとついたり。扶け下るすに、
髪を解けばねば／＼として膠らしきが着きたりと云
ふ。尤も其の女昏迷して前後を知らずとあり。
何の怪のなす處なるやを知らず。可厭らしく凄く、
不思議なる心持いまもするが、或は山男があま干に
して貯へたるものならんも知れず、怪しからぬ事か
な。いや／＼、餘り山男の風説をすると、天井から
毛だらけなのをぶら下げずとも計り難し。此の例本
所の脚洗ひ屋敷にあり。東京なりとて油断はならず。
また、恐しきは、――其の三十六

猿の經立、お大の經立は恐しきものなり。お犬
とは狼のことなり。山口の村に近き二ツ石山は岩山

なり、ある雨の日、小學校より歸る子ども此山を見るに、處々の岩の上にお犬うづくまりてあり。やがて首を下より押上ぐるやうにしてかはる／＼吠えたり。正面より見れば生れ立ての馬の子ほどに見ゆ、後から見れば存外小さしと云へり。お犬のうなる聲ほど物凄く恐しきものなし。

實にこそ恐しきはお犬の經立ちなるかな。われら、經立なる言葉の何の意なるやを解せずといへども、其の音の響、言知らず、もの凄まじ。多分はこゝに言へる、首を下より押上るやうにして吠ゆる時の事ならん。雨の日とあり、岩山の岩の上とあり。學校がへりの子どもが見たりとあるにて、目のあたりお犬の經立ちに逢ふ心地す。荒涼たる僻村の風情も文字の外にあらはれたり。岩のとげ／＼しきも見ゆ。雨も降る如し。小兒もびしよ／＼と寂しく通る。天地此の時、たゞ黒雲の下に經立つ幾多馬の子ほどのお犬あり。一つづゝかはる／＼吠ゆる聲、可怪しき鐘の音の如く響きて、威靈いはん方なし。

近頃とも言はず、狼は、木曾街道にも其の權威を

失ひぬ。われら幼き時さへ、隣のをばさん物語り
てー片山里にひとり寂しく棲む媪あり。屋根傾き、
柱朽ちたるに、細々と芋をうみ居る。狼、のし／＼
と出でうかゞふに、老いさらばひたるものなれば、
金魚麩のやうにて欲くもあらねど、吠えても嗅いで
見ても恐れぬが癩に障りて、毎夜の如く小屋をまは
りて怯かす。時雨しと／＼と降りける夜、また出掛
けて、うゝと唸つて牙を剥き、眼を光らす。媪しづ
かに顧みて、

やれ、虎狼より漏るが恐しや。

と呟きぬ。雨は柿の實の落つるが如く、天井なき
屋根を漏るなりけり。狼うなだれて去れり、と也。

世の中、米は高價にて、お犬も人の恐れぎりしか。